JSLA, Volume 10 (2018), 101–108

【調査報告】

4, 5 歳児における英語活動と教材研究

Review of English Activities for 4, 5-year-old Children, and its Teaching Materials

村 木 恭 子*
Kyoko Muraki

The aim of this study is to review the English activities at kindergarten for 4–5 year-olds class which the author started from 2010. This study consist of two parts; background and policy of English activities and teaching materials review which focused on study of "parts of body" and "number". The policy of English activities are to feel English sounds and rhythms, and to enjoy it by using body. The materials used in the classes were mainly books and songs, and sometimes used "arranged version" since the original ones were difficult for children. With the growth of interest in English, the speed of acquiring English is getting faster day by day, so reconsideration of teaching method and variety of materials need to be required.

1．はじめに

英語教育への関心は幼少期からはじまり、「習い事」と言えば英語が必ずといって良いほど上位に上がる今日である。小学校において英語活動は段階的に開始され、2020年より教科として開始される。中学・高等学校と異なり、小学生以下を対象とした英語指導者の養成は、公的な資格が現在は存在せず、J-SHINE（特定非営利活動法人 小学校英語指導認定協議会）が、2003年より J-SHINE 資格（小学校英語指導者資格）として指導者の養成の中枢を担っている。近年は、大学でも当該資格の取得が可能なカリキュラムが組まれつつある。

幼児教育の現場でも英語活動の導入は進んでいるが、小学校英語と比較するとマニュアル等は少なく、人員的な面からも、外部の英語教室への委託を導入している園が多くみられる。筆者は、2010年より私立幼稚園において、4，5 歳児（年中・年長児）を対象に英語活動を行ってきた。今回は、これまでの英語活動を振り返り、使用してきた英語教材についてまとめて

＊ 桜花学園大学学芸学部非常勤講師

いきたい。

2．英語活動導入の背景

第一言語習得の側面では、言語発達は5，6歳頃に大人の文法に等しい文法が形成され、大きな山場を迎えると言われている（フォスター, 2001）。通常4，5歳児になると、日常会話に支障がない言語が身についているが、中には発音・語彙の面からも言語の発達段階に達していない子どもや、書き言葉の学習を開始したことで、助詞をはじめとして話し言葉での誤用が見られることも、筆者が勤務する園の保育者からの報告には度々上がることがあった。このような面から、母語の習得が完成する前に英語活動を取り入れることは、母語への影響、特に書き言葉の習得に悪影響を及ぼさないだろうかという心配の声も少なくはない。しかし、非日本語母語話者を両親に持つ子どもの増加や、海外からの帰国児の増加、また英語への関心の高まりの声や導入に対する希望の声も踏まえ、英語への興味関心を高めることを目的として「英語を使って楽しむ活動」として、通常の保育に支障が出ない範囲での導入を決めた。

3．英語活動状況及び英語活動における考え方

英語活動の導入にあたり、事例調査を行ったが、英語教育を主としない幼児教育の現場でかつ30名以上のクラスを規模とした事例は筆者の知る限り数少ない。秀 他（2017）は、保育園の年長児クラス（29名）における「英語あそび」の活動の実践事例の中で、週1回1時間程度の活動の中で絵カード、音声CD教材、身体の動作、ゲームなど様々な道具・手法を使った活動の報告がなされている。その中で、園関係者が行うことによる指導の継続性が高いこと、また英語への親近感を高める効果にもつながっていると述べている。五十嵐・甘糟（2014）では、外部講師による保育園の年長児クラス（16名）における3ヶ月間週1回30分間の英語活動の実践事例の中で、人気のあった教材の分析や、教材の効果、子どもの変容について分析した。当初は、レッスン中笑顔が見られなかった子どもが、夏休み以降は笑顔が見られるようになり、保育者や保護者への聞き取りから、英語活動をとても楽しみにしており、学習した内容を家で毎回披露していたことが分かったという点は、とても興味深いエピソードである。

筆者の勤務する園では幼稚園という特性上、保育時間の制限や様々な季節の行事とそれに伴う活動、そして幼稚園教育要領にそった様々な主活動を行う中で、どのように子ども達や保育者にとっても負担のない範囲で英語活動を行うか、という観点から保育者と共に検討を重ね、1期を年中クラス（4歳児）10月～3月、2期として年長クラス（5歳児）4月～7月、と期間を限定して行うことにした。また、活動時間についても、集中力に負担がないように20分～30分程度、各期5・6回を目標とした。さらに、保育者の意見も踏まえ、以下の点

を英語活動における基本的な考え方とした。

1）英語の音・リズムに触れることを目的とし、アルファベットを無理に導入しない。体を使った活動を多く取り入れることで、「勉強」ではなく英語に楽しく触れあうことを目指す。
2）英語を覚えさせるためにカタカナ表記を取り入れたり、正しい発音を目指して無理に矯正しない。

松香（1996）では、子どもに英語を教える際は「楽しく」が原則であるとし、高橋・柳（2011）では、歌やチャンツを導入することで、心理的な抵抗を下げる効果があると述べている。また、英語のリズム・イントネーションを身につけさせ、繰り返し練習することができると述べている（松香，1996; 高橋・柳，2011）。松香（1996）は幼児のチューリップの歌の習得過程の観察から、1 つ 1 つの言葉が言えない、意味が分からなくても全体のリズムに追いつき、発音も段々上手になることを紹介している。更に、日常的に保育者は子ども達に新しい歌を教える際に、文字での導入よりも音からの導入を優先し、繰り返し真似ることで定着を図っている。その点からも、無理にアルファベットを導入することなく、英語に触れあうことは可能ではないかと考え、体を使った歌・リズム遊びを中心とした英語活動を実践してきた。

４．英語教材

教材として、文字を基本的には使わずに絵や音声などから理解しやすい内容を意識して「体の部位の名前」が出てくるものや「数」、「色」、「簡単な挨拶」などを使用してきた。今回はその中で、「体の部位の名前」及び「数」に関連してこれまでに使用してきた教材に関する記録である。

4.1　体の部位の名前に関する教材

１）Head Shoulder Knees and Toes（歌，体遊び）

日本語版の手遊び「あたま・かた・ひざ・ポン」は、日常的に気分整理の際に用いているので、とても取り組みやすい歌である。山内 他（2003）でも、小学校英語の導入活動として、体の部位に触りながら体を動かすことで、心もほぐれると紹介されている。日本語版の手遊びよりは少し動作が複雑であるため、最初はゆっくりと一つずつの単語と動作を繰り返し行い、英語での定着を図っている。また、歌の速度を上げたり、1 単語だけ声に出さずに動作だけ行う、ゲーム性を持った形で行うことも、子ども達の意欲を高める際には有効であり、毎年この 1 曲を何度もやりたいとリクエストが入る程人気の曲であり、実際にあっという間

に覚えて歌えるようになっている。

さらに、Simon Says と呼ばれるゲームで、体の部位の前に “Simon says, Touch your 〜” ではじまる命令文で、その部分をタッチする活動も定着度が高まった際には有効である。

2）One little finger（手遊び）

両指を 1 本ずつ使って、天井を指したり、床を指した後に体の部位を指す、体の部位を 1 つずつ確認したり、覚えることができる手遊びの 1 つである。天井 “ceiling” や床 “floor” は、発音が年少者には難しくわかりにくいため、“up” “down” を用いた教材（Super simple songs）の使用も交えて行ってきた。“Head shoulder knees and toes” よりは短く調整することができること、また速度を自由に調整できる点から、 1 回だけでなく、毎回のレッスンの中で導入として少しずつ取り入れることが可能な手遊びである。

3）Open shut them（手遊び）

手を開く、閉じる、叩く、手を膝など体の部位に置く（触る）というのが 1 セットになった手遊びである。音声教材も複数あり、「歌」として学習することも可能であるが、単純な動作であることから、音声教材なしで手遊びとして使用することが多い。動作の速度を変えてみたり、回数をその時々に合わせてアレンジすることができるため、とても使いやすい手遊びの一つである。

“Open shut them” には、様々な歌詞が存在するが、中でも Super simple songs の教材は、“big – small”, “fast – slow” などの反義語を用いており、映像教材を合わせて使用することで、言葉の理解がさらに深まる効果が期待できる。

4）Hokey Pokey（歌，体遊び）

右手を前に出す、後ろにする、振る、回るなど体の部位の名前と様々な動作が含まれたテンポの良い音楽である。イギリスでは “Hokey Cokey” として歌われているようであるが、内容としてはアメリカ版の “Hokey Pokey” と大きな違いはないようである。山内 他（2003）では、ゆっくり歌いながらの動作も解説してもよいと述べているように、単純な動作ではあるが、少々複雑な歌詞・音楽であるため、年少者にはゆっくりと歌いながら動作と言葉を少しずつ覚えていけるような工夫が必要である。場合によっては mpi 版や、Super simple songs 版のような歌詞が簡単にアレンジされている教材を使用することも有効ではないかと考える。さらに、“right”, “left” の学習を合わせて行う必要もある。

5）Wiggle, Wiggle（歌，体遊び）

お尻や鼻、耳などをクネクネくねらせて動物になりきる歌・体遊びである。くねらせる部分は、ウサギであれば耳など動物の特徴を生かした構成になっているため、すぐに覚えて真似をすることができる。また、“Who are you?” や “I’m a monkey.” など繰り返し簡単な定型表現が用いられているので、何度も復唱することでフレーズを覚えることも可能である。歌の展開が特徴的であること、動物になりきるゲーム感覚で取り組むことができるため、人気のある曲の 1 つである。

6）A Teddy Bear（絵本）by Nakamoto Makiko, Kakegawa Hideko

ゴミ置き場に置かれたバラバラになったクマを、体の部位ごとに 1 つずつ組み立てていくストーリーで、体の部位が 1 つずつ出てくる理解しやすい話になっている。「次は何を組み立てる？」というクイズ形式にすることや、体の部位を英語で何と言うか、復習を兼ねてこの本を読んだり、逆に “Head shoulder knees and Toes” の導入として読むことや、“Open shut them” を手遊びで歌った後に読むこともできる。英語の学習だけでなく、バラバラになったクマは可哀想、物は大事にしなければならないという事を考えてもらうことを毎回行っている。

7）From head to toe（絵本）by Eric Carle

様々な動物が、頭を回す、首を曲げるなど、動物の特徴を生かした体の部位を使った「できる動作」を紹介していくのが特徴的な絵本である。繰り返しの表現が多く使われており、例えば “Can you do it?” “I can do it.” のような呼応になっている所もあり、実際に一緒に動作を真似たり、慣れてくれば一緒に音読することも楽しめる絵本である。 1 回ではなく、何度も繰り返し読むことで楽しみながら体の部位と動作、そして動物の名前の定着を深めることが期待できる教材である。

4.2　数に関する教材

1）Seven Steps（歌，集団遊び）

数字の 1 から 7 までが、順番に出てくる音楽で、リズムも取りやすく、繰り返しも多く含まれており、リズムも簡単なことから年少者にも馴染みやすい音楽の一つである。実際に 1 回英語活動で取り組んだだけですぐに覚えることができ、英語活動外でも口ずさむ園児が毎回見られる。山内 他（2003）でも、数を扱う活動の中で取り入れられ、クラス全体が輪になって体を動かす活動であると紹介されているように、フォークダンスをしたり、 2 人組になって、手遊びをすることも可能である。慣れてきたら、曲のスピードが変化する教材を使用し

たり、数字が降順になった Super simple songs 版の使用も応用編として使用できる。

2）What's the time, Mr. Wolf?（集団遊び，絵本）

「オオカミさん、今何時？」という「だるまさんが転んだ」を応用した形の集団遊びがある。集団遊びでは、おおかみ役に言われた時間の分の歩数だけおおかみに近づいていき、「夜中の12時 "It's midnight!"」と言われたらオオカミに捕まらないように逃げ回る集団遊びである。

集団遊びと似た内容の絵本もあり、オオカミが、朝起きてから学校に行き、帰ってきて夕ご飯を食べるまでの 1 時間刻みの絵本になっているため、時間・数字の学習を絵と共に行うことができる。使用している表現は幼児には難しいものも含まれてはいるが、絵で描写されているため、理解に不自由な所は見られない。

例年、日本語でこの集団遊びを行った後にこの絵本を紹介したり、この絵本の紹介後に集団遊びを日本語及び英語で行ったりしている。数字の習得だけでなく、集団遊びへ興味を促すきっかけになっているのではないかと考える。

3）Ten in the bed（歌）

10匹の熊がベッドの上に寝ているところを、"Roll over" のかけ声で、 1 匹ずつ床へ落ちていくお話で、10から 1 ずつ数が減っていき、最後には 1 匹になってしまう遊び歌である。絵本や、音声 CD もあるが、映像教材を見ながらリズムに合わせて数を数えることを楽しむことが、最も効果的な方法であると感じる。

4）Five little monkey jumping on the bed（歌／チャンツ）

5 匹のサルが、ベッドの上でジャンプしていて 1 匹ずつ床に落ちてたんこぶを作ってしまい、お母さんサルがお医者さんに相談の電話し、1 匹ずつサルが減っていくというお話になっている。"Ten in the bed" と似たような構成になっているが、この曲もリズムが良く、歌というよりはチャンツになっているので、映像を見ながら数を一緒に数えたり、実際に落ちる動作、電話をする動作などを真似て楽しむことができる。

5）Ten little Indians（歌／手遊び）

マザーグースの 1 つで、10人のインディアンが 1 人ずつ増えて行き、10人になったら 1 人ずつ減っていくというシンプルな歌である。日本語でも、「10人のインディアン」として手遊びなどで歌われていることもあるが、近年はメロディーが同じ替え歌版の「 1 ぽんと 1 ぽんで」が歌われていることが多く見られる。数を自分の指を使って数えながら歌うには適した曲ではあるが、近年はこの曲をベースに作られた "Ten little Snowmen" を使用することが

多い。10個の雪だるまが 1 つずつ増えてきて、太陽が出て融けて 1 つずつ減っていくというストーリーになっているため、ペープサートを見せて状況を説明すると、理解が高まる。

5．まとめ

本稿では、これまで保育現場で行ってきた英語活動において使用してきた英語教材を、「体の部位の名前に関する教材」及び「数に関する教材」に絞って振り返りまとめた。どの教材も折に触れて何度も繰り返し使用してきており、英語活動が終わった後に口ずさむ光景を何度も目にしたり、母親を前に歌ってくれたと聞くこともあり、子ども達の記憶の中に残ってくれていることを日々実感している。

これまでに使用してきた教材の中には、「色に関する教材」また量は少ないが近年は「挨拶に関する教材」も一部取り入れているため、今後残りの教材についても一度整理していく必要がある。さらに、これまでは英語活動の中心が「歌に合わせて体を動かしながら歌う」ことであったが、一部教材では部分的に行ってきた大島（2011）で言われている「英語絵本を子ども達自身が声に出して豊かな表現で読むリードアラウド」も取り入れていきたいと考えている。

年々英語への関心の高まりと共に、英語に幼少時から触れている園児が増加していることもあり、子ども達の習得が早くなっている傾向にあるため、教材の使い方・種類の工夫が益々必要になってきていると感じている。実際にどの程度保護者が英語への関心を持っているか、アンケート調査などで問いかけることも、今後の英語活動運営のヒントになるかもしれない。また、今後も引き続き先行研究の調査などから、教材の使い方・運営について、筆者自身が学んでいく必要があると考えている。さらに機会があれば、第三者に英語活動を参観してもらうことで、アドバイスを頂くこともより良い英語活動のためには効果的かと考える。

謝辞

幼稚園における英語活動に協力頂いた関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

参考文献

Annie Kubler (2004) What's the time, Mr. Wolf? Child's Play.

五十嵐淳子・甘糟節子 (2014)「保育現場による英語活動の取り組み―保育園での実践を通して―」共大研究，12, 273–292.

Eric Carle (1999) From head to toe, HarperCollins.

大島英美（2011）『声に出して読む英語絵本：初めてのリードアラウド』中央公論新社

スーザン・H・フォスター＝コーエン　今井邦彦（訳）（2001）『子供は言語をどう獲得するのか』岩波書店

Super Simple Learning (2014)『Super Simple Songs 1 2nd Edition』
Super Simple Learning (2014)『Super Simple Songs 2 2nd Edition』
Super Simple Learning (2014)『Super Simple Songs 3 2nd Edition』
Super Simple Learning (2013)『Super Simple Songs Video Collection vol. 1』
Super Simple Learning (2014)『Super Simple Songs Video Collection vol. 2』
高橋美由紀・柳善和 (2011)『新しい小学校英語教育法』協同出版
外山節子・入江智子・坂井邦晃・佐藤貴子・渋谷徹・藤沢京美 (2010)『英語の絵本活用マニュアル』コスモピア
Nakamoto Makiko, Kakegawa Hideko (2012) アプリコット Picture Book シリーズ④―― A Teddy Bear, アプリコット出版株式会社
秀真一郎・志濃原亜美・小野克志・木本有香・田中卓也・中島眞吾・横井一之・鳥田直哉 (2017)「私立保育園における英語活動の実践実例」『吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）』第27号，29–38.
松香洋子 (1996)『子供に英語をしゃべらせたい――児童英語教育、私の方法』KK ベストセラーズ
松香洋子 (2005)『はじめてのえいごシリーズ うた 2nd Edition：The WIGGLE BOOK』mpi
mpi (2000)『Songs and Chants』
山内豊 編 (2003)『子どもたちと楽しく！　はじめての英語活動』教育同人社